

# マイノングの問題

これまでの根深い捉え方によれば、言語は、いくつかの語から「組み立てられたもの」である。そのさいそれぞれの語は、対象にたいしての語であるということによって、その「意味づけ」をもつ。ひとつひとつの語は、「名称」(nomen, sermo)であり、ある言語を学ぶということは、ひとつひとつの語が名づけているものを学ぶことにはかならない。左にも名づけていない語はしたがって、まったくいかなる語でもなく、たんにひとつの「音声」(vox)にすぎないし、それを語とみなせば、無意味である<sup>(2)</sup>。

たとえば、次の命題を例にあげてみる。「左手の上にある本は赤い。」において、△左手の上にある本△という表現は、当然「このきまった本を指示している」、あるいは「その本を名指している」ということであるように思われるし、またこの本について言い表わされることは、もちろん「この本は、赤い。」ということである、と思われる。このことは△左手の上にある本△という表現が主語であり、△赤い△という表現が述語である、ということによって表現される。

しかし、「黄金の山は、存在しない。」という命題の場合はどうか。ここでは△黄金の山△が主語であると考えるだろうか。したがって△黄金の山△という表現が、じつさいにある「黄金の山」を指示しているとか、それを名指しているとか、言えるだろうか。

この問いは、あるいは、「黄金の山」が実在しないことを主張するのに、「黄金の山は、存在しない。」という命題で充分なのかという問題におきかえられる。もちろん、存在しない対象を名指すことはできない。名指すことは、対象を名指すことにはかならないし、対象が存在しないところでは、やはり名指すべき何ものも存在しない。

この疑問に対し、マイノング<sup>(4)</sup> (Meinong, A. 一八五三—一九二〇) は次のように説明する。「黄金の山は存在しない。」という命題に

において、我々はこの命題が「真」であることに、同意する。しかし、もし「黄金の山」<sup>5</sup>という表現が主語ではない、すなわち、対象を指示していないし、名指していないとしたら、この命題は「真」ではなく、「無意味」な命題となろう。それ故、マイノングは、「黄金の山」という名称が、ある非経験的な対象を指示していると推論する。<sup>(5)</sup>

註

(1) 意味というものを言語と言語外のものとの関連の中で考えようとするとき、ある語が指示する対象をその語の意味と考える立場がある。

しかし、この解釈からは直ちに多くの困難が現われる。まず第一に、指示対象を意味と考えると、意味を持ち得る語は、固有名詞か、有限確定な指示対象をもつ集合名詞に限られることになる。たとえば「馬」という語の意味は、あらゆる馬全体を實際に指示することはできないから、その意味は一部分しかわからないと言わざるを得ない。また、「赤さ」というような抽象名詞に関しては、その対象が実在するか否かという問題を巡って、いわゆる「普通論争」がなされた。

アベラルドゥス (Abelardus 一〇七九—一一四二) は名称説 (Sermonism) を唱えた。悟性が個物の共通の類似点をとらえる。これが物の本性である。認識は個物に始まるが、この初まりの何かを常に保存している。認識は個物なしには、ありえない。抽象の結果が普遍である。普遍は事物でもなく、一つの語でもなく、立言 (sermo) である。だから、普遍は対象を指示しうる限り、語である。個々のものが、多様な姿をもっていないが、相似しているのは、普遍が、創造以前に、神の精神の中の概念 (conceptus mentis) として、あらかじめ存在しており、すべてのものは、これを原形として造られたからであるとする。

(2) 有意味とは、指示対象が存在すること。指示対象と語（あるいは命題）との一致する「真」の場合と、一致しない「偽」の場合に分けられる。無意味とは指示対象が存在しないこと。

(3) 主語は判断の主語であるから、存在するすべてのものに当る。主語とはなり得るが、述語とはなり得ないものがある。アリストテレスはそれを個物 (tode ti) と呼ぶ。

(4) マイノングは「対象論」を提唱した。対象論とは、捕捉され思念 (meinen) される一切の対象性を、その存在非存在或は可能不可能に關せず純客観的に研究する先天的学である。

(5) マイニングは、意識作用を何物かを指示する作用として、何らかの対象を内在的に含むものとして考える。黄金の山やユニコーンのごとき非・経験的名称の場合、作用は実在的に存在するが、対象は実在せぬもの、矛盾を含んだものでもよいと考えた。

„Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie“ 1904

## 二

### ラッセルの記述理論

我々はこのマインングの問題を中心として、ラッセルの「記述理論」<sup>(1)</sup>を考察してみる。ラッセルは「記述理論」の構想を一九〇五年イギリスの哲学誌「マインド」に寄せた論文「On Denoting」で最初に発表した。「記述」は「確定記述」と「不定（あるいは多義）記述」に分類される。「不定記述」とは a sound<sup>(2)</sup>（「あるこれこれのもの」）という形の語句で「確定記述」とは the so-and-so（「定まったこれこれのもの」）という形の語句である。<sup>(2)</sup>

不定記述とは

(1) 対象を指示する、あるいは名指しているかのようにみえて、実際は何物も指示し、あるいは名指していない記述。……………「ユニコーン」 (a unicorn)

(2) 不定な、あるいは不確定なものを指示する、あるいは名指している記述。……………「ある人」 (a man)

確定記述とは

ある単数の、定まった対象を名指し、あるいは指示する記述。……………「ウエヴァリーの著者」 (the author of Waverley)

この二種類の記述のうち、ラッセルは、「不定（あるいは多義）記述理論」の中でマインングの問題を論じている。<sup>(3)</sup>マインングが非・経験的对象を指示していると考えた△黄金の山△、△ユニコーン△という表現を含む命題「私は、ユニコーンに会った。」<sup>(4)</sup>（「I met a unicorn.」）について考察してみよう。ラッセルはこの命題を分析して次のように言う。この命題には実際のユニコーンが入っていない。我々がこの命題の意味を理解するには、作り話の中だけに現われる怪物物の定義を知っているだけである。この点において、「私は、ユニコーンに会った。」（「I met a unicorn.」）という命題は、文法に誤られて、伝統的論理学において同一の形式と考えられてきた命題、

たとえば「私は、ジョーンズに会った。」(“I met Jones.”)とは「論理形式」(logical form)が異なる。<sup>(5)</sup>

「私は、ユニコーンに会った。」(“I met a unicorn.”)という命題においては、四つの語(I, met, a, unicorn)が一緒になって全体として「意味」な命題をつくっている。<sup>(6)</sup> それに対し、この命題の部分 $\wedge$ ユニコーン $\vee$ という表現は、何ら対象を指示、あるいは名指してはいない。それ故、 $\wedge$ ユニコーン $\vee$ という表現は、それ自体において「無意味」となる。

ラッセルは、「記述理論」を用いて、この二つの命題の「論理形式」を示す。<sup>(7)</sup>

命題 (一)「私は、ジョーンズに会った。」(“I met Jones.”)

命題 (二)「私は、ユニコーンに会った。」(“I met a unicorn.”)

命題(一)において $\wedge$ ジョーンズ $\vee$ という表現は、実際の人間、ジョーンズを指示し、あるいは名指している。それ故、この命題は次のような「論理形式」を持つ。

$\wedge$ ジョーンズ $\vee$ を定数aと書くことと約束すると、『命題「私は、定数aに会った。」』

命題(二)において $\wedge$ ユニコーン $\vee$ という表現は、対象を名指し、あるいは指示していない。この命題は「命題関数」(propositional function)<sup>(8)</sup>を含んでいる。それ故、この命題は次のような「論理形式」を持つ。

『「私は、変数Xに会った、そしてXはユニコーンである。」という命題関数が時には真である。』

ラッセルは命題の中に入る表現のうち、 $\wedge$ ジョーンズ $\vee$ のように、ある対象を名指し、あるいは指示する表現を「要素」(constituent)<sup>(9)</sup>と呼び、それに対し、 $\wedge$ ユニコーン $\vee$ のように、命題全体は意味であるが、それ自体は対象を名指し、あるいは指示しない表現を「概念」(concept)と呼ぶ。マイノングの誤りは「概念」を「要素」と取違えた点にある。

註

- (1) 記述理論に関するラッセルの著作は、「On Denoting」のほか、一九一〇年～一九一三年『プリンキピア・マテマテカ』(Principia Mathematica)・一九一九年『数理哲学序説』(Introduction to Mathematical Philosophy)がある。ラッセルは、『数理哲学序説』の第一章自然数列の冒頭の部分(第二二版二ページ、岩波文庫・平野訳一〇ページ)において、この書につ

いて次のように述べている。「数理哲学を簡単にかつ通俗的に、しかも初等的な取扱いが不可能なほど問題視され、困難視されている部分には全然立ち入らないで叙述するのが本書の目的である。すなわち本書は単なる入門書として書かれたものである。詳細な論述を希望する読者は『Principia Mathematica』を参照されたい。」「しかし、両書に現れた哲学的思想には相当の隔りがあると思われる。G. E. Moore, 'Russell's "Theory of Description"', in The Philosophy of Bertrand Russell, Ed. Paul Arthur Schilpp. ('The Library of Living Philosophers', V 5), 1944 参照せよ。

(2) Introduction to Mathematical Philosophy, p. 167

(3) *ibid.*, p. 169

(4) *ibid.*, p. 168

(5) 「ここに起ってきた非・実在性の問題は重要なものである。この問題を取扱った論理学者の大部分は文法に誤られて、間違った方向に進んでいる。すなわち、彼らは論理的分析の場合、文法的形式を真実以上の正確な指導であるとみなしていた。」(*ibid.*, p. 168 平野訳二〇ページ)

エイヤー (A. J. Ayer 一九二〇) は「このラッセルの説を發展させ、『検証理論』と結びつけることによって、形而上学の除去を試みた。」「同じようなあやまりが、「一角獣は虚構のもの (fictitious) である」というような種類の命題についておかされて来た。」(2)でもまた「Dogs are faithful」(「犬は忠実である」)という英語の文章と「Unicorns are fictitious」(「一角獣は虚構のものである」)という英語の文章との間、そして他国語におけるこれに相当する二つの文章の間に表面上文法的な類似があるという事実が、それ等が論理的に同じかたのものであるという思いこみ (assumption) を生んでいる。犬は、

忠実であるという属性を持つためには、存在しなくてはならない。そこで一角獣も何等かの意味で存在しなくては、虚構のものであるという属性を持つことは出来ないと考えられる。しかし、虚構的な対象 (object) が存在するというのは、明らかに自己矛盾であるから、それ「一角獣」はある非・経験的な意味で実在性をもつ、といういいかたが工夫された。つまりそれは、存在する事物の存在する様相 (mode) とは違った様相であるところの、実在物として存在する様相を持っているというのである。

しかし、ある「もの」が日常的な意味で実在的であるかどうかをしらべる手段はあるけれども、それが今いったような意味で実在性を持つか、どうかをしらべる手段はまったくないのであるから、虚構的な対象は、ある特殊で、非・経験的な実在物の様相を持

つという確言には、字義上の意味が全然かけているのである。この確言は、虚構のものであるということは一つの属性であるという仮定の結果である。そしてこれは、存在を一つの属性と考えるあやまりと同じ段階のあやまりであり、同様にその非をあげることが出来る。一般に実在性を有しつつ存在しない本体を要請するには至るのは、ついさっき引合いに出した、すべて文章の文法上の主語になりうる語及至語句に対しては、何処かにそれに対応する実在的な本体がなくてはならないとする迷信の結果なのである。『(A. J. Ayer "Language, Truth and Logic" 1936 吉田夏彦訳二二～二三ページ。)

- (6) それぞれの文は「真」もしくは「偽」か、それとも「無意味」かのいずれかである、とラッセルは主張する。したがってまた、論理的主語によって「名指しされたもの」あるいは「指しされたもの」が実際に存在するときのみ、文は「有意味」でありうるという点にラッセルは哲学的出発点を見い出している。しかし、ストローソン (P. F. Strawson, 一九一九) はこのラッセルの出発点を拒否する。ストローソンは「文(あるいは表現)」と「文(あるいは表現)の適用」とを区別する。

"I have described how the logical character of sentences whose use to make statements presupposes the existence of something referred to by their grammatical subjects can go unnoticed because (or partly because) of the operation of the bogus trichotomy 'true, false, or meaningless'; and how this error operates in the realm of general statements. As the last paragraph suggests, this error does not operate in that realm alone; but by invading that of singular statements as well, tends to limit still further the class of referring expressions or logical subjects. A classical illustration of this is provided by Russell's 'Theory of Definite Descriptions'. P. F. Strawson, Introduction to Logical Theory, pp. 184—185, 1952

- (7) Russell, *ibid.*, pp. 168—169

- (8) 「命題関数を知らなかったために多くの論理学者は、非実在な対象があると結論する止むなきにいたった。例えばマイノングは「黄金の山」や「円い四角」等について語ることができ、しかも「黄金の山」や「円い四角」等を主語とした真な命題を作ることが出来るから、それらのものはある種の論理的存在をもたなければならない。もしそうでないとすればそれらを含む命題はみな無意味のものとなるからであると主張している。しかしそのような理論の中には、どんな抽象的な研究にさえ保存されなければな

らない実在感が欠けているように私には思われる。」(B. Russell, *ibid.*, p. 169 平野訳二二〇～二二二ページ)

註 9)

「このように命題の中にはいつてくるものはいわゆる概念とよばれるものだけである。例えば「本角の獣」の場合でも単にその概念があるだけで、「本角の獣と名づけられる非実在的な、例えば影のようなものさえないのである。しかもなお「私は一本角の獣にあった」という主張は意味(偽ではあるが)をもつものであるから、この命題を正しく分析すれば、そこには「本角の獣」という概念がはいっているだけで、実際の「本角の獣」が要素としてはいつていないことが明かになる。」(Russell, *ibid.*, p. 168 平野訳二一九～二二〇ページ)ラッセルはこの書のすぐ後で、「要素」を「名前」(name)、「概念」を「記述」(description)と書きかえている。(Russell, *ibid.*, p. 174)

一九一〇年と一三年の『プリンキピア・マテマチカ』と一九一九年の『数理哲学序説』とでは「普遍」に關してラッセルの見解が異なっていると思われる。「プリンキピア・マテマチカ」における立場は、基本的には、フレーゲ(Gottlob Frege 一八四八～一九二五)の「概念実在論—実念論」(Realismus)である。フレーゲによれば、数学や論理学の対象は「実在する観念である」。それは時空中に位置を占める感覚的実在ではないが、しかし、認識主観から独立して、客観的に存在する。ラッセルは、フレーゲの実念論に基づいて、自らの立場を「論理的原子論」(logical atomism)とよんだ。しかし、『数理哲学序説』においては、「概念」を実在とみる考えは放棄された。

このラッセルの「哲学的発展」については次のように述べられる。

The first phase of Russell's realism with respect to universals could be appropriately called a Platonic realism. The logical phase of this realism can best be seen in the *Principles of Mathematics*, in which

Russell regards classes, numbers, and logical constants as real. . . . In this same book, however,

Russell had already followed Peano in developing a logic of relations and a definition of number in terms of classes. Russell says that Peano taught him two things, the distinction between a proposition and propositional function, and the distinction between a class of one member and that member. Although these ideas were on their way to their full development in *Principia Mathematica* in which they would allow Russell

to dispense with numbers and classes as entities, as this time only propositional functions were regarded as expressions , while numbers and classes were still regarded as real. Elizabeth Ramsden Farnes, "Bertrand Russell's Theory of knowledge" , 1969, p.173